

日本語の風景

佐藤武義著

Sato Takeyoshi



前橋市立図書館
☎(027)224-4311

おうふう

日本語の風景

佐藤武義著

Sato Takeyoshi

おうふう

著者略歴

さとう たけよし
佐藤 武義

1935年、宮城県に生まれる。1965年、東北大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。
現在、東北大学言語文化部・大学院国際文化研究科教授。

〔主な著書〕『国語史』（上下巻，共著，桜楓社），『雲州往来二種』（編著，勉誠社），『今昔物語集の語彙と語法』（明治書院），『暮らしのことは辞典』（共著，講談社），『方言に生きる古語』（共著，南雲堂），『漢字の泉』『続 漢字の泉』『続々 漢字の泉』（共著，河北新報社），『概説日本語の歴史』（編著，朝倉書店），『漢字百科大事典』（共編，明治書院），『展望 現代の日本語』（編著，白帝社）

日本語の風景

平成9年3月3日

初版印刷

平成9年3月8日

初版発行

定価はカバーに表示してあります。

著 者 佐 藤 武 義

発 行 者 田 中 良 和

印 刷 所 共信社印刷所

発行所 株式会社 お う ふ う

東京都千代田区猿楽町2-2-6

畑山第一ビル

（郵便番号） 101（振替） 00140-2-665242

（電話番号） 03-3295-8771（営業）

03-3295-8774（編集）

検印は省略いたしました。

©T.S. 1997 Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが、落丁・乱丁の際はおとりかえいたします。

ISBN4-273-02948-0 C0095

はしがき

わたくしたちは、言葉を無意識に話しているときには、何の痛痒も感ぜず、天与の贈物と思っているふしがある。

しかし、一度言葉に疑問やひっかかりを持ってしまうと、言葉は天与の完全無欠なものではないことを知る。たとえば、旅行して他地方に行くと、はっきりその違いに行きあたる。挨拶の言葉一つとっても、自分の選ぶ言葉と根本的に異なっていることに気づいて驚くことがある。

この違いに気づいて、その驚きや疑問に答えたいと思う人がいよう。そして、観察を通して感じた言葉の実態から、言葉の問題の法則やその歴史を明らかにする立場へ進むのである。

観察がその問題解決に向かうきっかけとなるはずである。そのきっかけは、生涯その問題にかかわる者にとっては、無限に存在することが理想である。

そのきっかけの話題の一部になることを願望したことを思い出し、今本書にその希望、期待を託して『日本語の風景』とした。

平成八年十一月三日 文化の日

佐藤 武義

日本語の風景
目次

はしがき

日本語の風景

ことばの誕生とその背景	8	／生きてゐる言語	10	／千支 ^{えと} の中のサル	12
歌ことばの背景	14	「青雲 ^{あそくも} 」は翻訳語	17	／書名『雲州往来』考	19
『おくのほそ道』発句の音特徴	20	／『近世仙台方言書』と方言の歴史	22		
ドント祭と語源	24	／訳語の源流	27	／荻野アンナの『背負い水』	29
煙草をのむ	31	／「違和感」と「異和感」	38	／スゾーカンが来た	48
汽車から電車へ	51	／ガス漏れ・禁煙	54	／時間が「足りない」	60
政治家の「手法」	65	／流行語と商標登録	68	／ことばの独創	71
ヘプバーンとヘボン	73	／広辞苑によれば	75	／後家異変か	77
目立つ言葉	79	／新発田藩とその学問	81		

夏目漱石の言葉の風景

漱石と近代日本語〔漱石の時代（上中下）／江戸語／明治語／翻訳語／外来語／ 欧文脈／文体／現代性〕	92	／漱石の「吾輩」	112	／漱石の「後架」	130
---	----	----------	-----	----------	-----

漱石の「ポケット」
明治文学の中の小道具

138
／『こゝろ』の「K」の意味
163
／志賀直哉と日本語
168

145
／太宰治と夏目漱石

152

日本語の風景

ことばの誕生とその背景

『河北新報』平成元年六月六日

現代語において、ことばが誕生する経緯をさぐることは、比較的容易である。

「氣くばり」「落ちこぼれ」「翔んでる」は、本来の日本語に特別の意味を加えたものであり、「ねくら」「ねあか」は、意表をついた語構成で、斬新な意味を表したものである。その上、「氣くばり」のように、NHKの元アナウンサー鈴木健二氏の著書『氣くばりのすすめ』から流行語となり、最初の使用者を特定できるとともに、ことばによっては、使用地域・使用時期も特定できることが多い。「がめつい」は、昭和三十四年に東宝で公演された菊田一夫作の戯曲『がめつい奴』から流行語となり、全国に広まった。もともと関西方言であったものである。「ナウい」は、今風、当代風を意味するアメリカ英語出自の外来語に、形容詞の活用語尾「い」を加えて成立した。

現代は、このようにことばの誕生が明らかにできる場合が多いが、時代をさかのぼらせて、古代にいたると、その経緯が多く暗黒に包まれてしまう。

「祖父母」は、古代において、子供からみて父母の一代上の世代である点に着目して、「大きい父母」

と意味づけして、「オホ（大）十チ（父）」からのオホヂ、「オホ（大）十ハ（母）」からのオホバが成立し、その後、複雑な変化を経て、今のオジ（ヂ）イサン、オバアサンに落ち着いた。また、子供からみて、父母の兄弟は、「小さい父母」の理解のもとに、「ヲ（小）十チ（父）」のヲヂ、「ヲ（小）十ハ（母）」のヲバが成立した。このように、ことばの成立の過程が推定できる語は、古代語において、それほど多くない。

これに対し、このたび刊行された山口仲美氏の『ちんちん千鳥のなく声は』（大修館書店）は、鳥の鳴き声が日本語の中に、どのような経過をたどって登場してきたかを、日本人の物の見方、生活環境を考慮しながらまとめたものとして出色の書である。

カラス、ウグイス、ホトトギスなど身近な鳥十一種を対象に、鳴き声が日本語の中に登場してから、現在にいたるまでを扱っている。スズメの鳴き声は、「シウシウ」「チューチュー」から「チュンチュン」に変わり、ニワトリは、「カケロ」「コケコー」「コッカコー」「コッケイコー」を経て、明治時代に「コケココー」があらわれる。キジの鳴き声を古代語で「ホロロ」「ホロホロ」と鳴くとされていることが、長年不審であったところ、本書では羽根を打ちあわせる音からでたもので、後で鳴き声に転用されたことを納得がいくように説明されている。また、鳥の鳴き声にまつわるエピソードとして、天狗は、トビの化身で、天狗の高い鼻は、トビのくちばしをかたどったことを江戸時代の絵入り版本の絵によって証明し、天狗の高い鼻の発生にも言及している。

このように、鳥の鳴き声の言語化の過程の研究は、単に鳥の鳴き声の研究にとどまらず、古代語全体

の誕生を知るためにも、山口氏の示された方法を応用することによって、有益な指針を得ることができ
るように思う。今後、古代語誕生の解明のために、多面的な発言が期待されるところである。

生きている言語

『生協ニュース』三五〇号、「さんばみち(2)」昭和五十六年七月

大袈裟に言うところ、自分の専門分野に驚異と畏敬と無限に近い奥深さを感じなければ、一生を研究生活
に托す気にはならないであろう。当然過ぎることであるが、底の浅い研究対象であれば、一瞬のうちに
片がついて、わざわざ一生や命をかける必要は全くないからである。

研究対象に対し無限に近い奥深さの意識があるからこそ、その未知なる世界の解明に意欲が湧くので
ある。しかし、無限と思われる対象に無手勝流で立ち向っても思うような成果は得にくい。そこで、実
際、研究や本格的な仕事に取りかかる前に、作業仮説を立て、予備調査なり、ある程度の見通しなりを
もってから本格的な調査や研究を進めていくことになる。その結果、取り返しのつかない失敗もなく、
予想通りの成果を手にすることができる一方、予想もできなかった結果に出会って驚喜することもある。
あたかも、長く、暗い樹海をはいずり回ってたくたになった頃、突然眼下に広大な眺望が開けた時の

氣宇壮大な気分、または、恍惚感にひたるような気持ちとでも言おうか。

このように、発見の喜びや仮説が合理的に裏付けされた時の喜びは、研究者なら誰しもが必ず経験するものである。そして、この喜びのあとには、どうしてこの世の森羅万象が合理的で矛盾のない、一貫性と必然性に結び付けられているのかに驚異の眼を向けるとともに、この合理性を創り出した造物主に畏敬の念を禁じ得なくなるのである。

私の専門とする国語学においても事情は右と全く同じである。

そんなさやかな例として「話す」という語を挙げることにしよう。この語は、室町時代に生まれた新語で、口から言葉を「放す」ところから成立した。資料を丹念に調査すれば、このようなことは確実に解るが、どうして室町時代に「話す」が誕生しなければならないのか、これを説明することは容易ではない。この時期にたまたま「放す」から「放す」が派生したため、これを転用して「話す」としたというのでは説明にならない。そこで、視点を変えて、この語の成立以前にこの語の代りをしていた語を追求することが必要になる。そうすると、これに相当する語が「語る」であることが判る。「物語」という語からも解るように、一まとまりの話題を述べるという語義である。

一方、この語がそのような語義をもつために、取るに足らない話題を大袈裟に吹聴する場合にも「語る」が用いられるようになった。そして、現代語にもある「かたり（騙）」が人をたぶらかす意であることから判るように、「語る」が本来の語義から次第に逸脱するようになってきたため、本来の語義に軌道修正を加えなければならなくなった。「語る」ではもうその任には堪えない。そのバランスがと

れなくなった時、そこに「話す」が生まれたのである。

ここから、生きものとしての言語のダイナミズムが感じ取られる。言語の変貌には、何らかの必然性を見極めることが重要なのである。

（参照）山内洋一郎「動詞『話す』の成立」〔『国語語彙史の研究』二、昭和五十六年五月〕

干^え支^との中のサル

『河北新報』平成四年一月三日

年が改まると、時の流れに区切りがないはずだが、何か気分までが新たになる。とかく、人生に悔いすることが多いため、新しい年に、過ぎた年にない新鮮な夢や希望を託したくなるのが人の常らしい。

そこで、今年は、サル年にあたるから、サルの性癖のように、陽気に、かつ活発に活動する年にしようかなどと考えてしまう。干支に動物が登場するため、動物の性癖と結びつけて、このような愚にもつかない連想が湧くところに、干支の楽しみがある。

十二支の子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥に、十二の動物名をあてたのは、農事暦として、農民が農事の日時を即座に理解できるようにするためという。十二支に十二の動物名をあてた

文献は、中国の後漢の王充著『論衡』物勢篇が最初で、子にネズミ、丑にウシ、寅にトラ、……とあて、今年の干支である「申」にサルをあてた。

サルは、漢字では、手長ザルの「猿」「狙^そ」、尾長ザルの「獾^か」、大ザルの「獼^び」「猩^ぐ」をはじめ、多くの漢字がみられ、中国ではサルの形態上の特徴を漢字で分析的に表した。ところが、日本語では、「まし」「ましら」とも言い表したが、サルと言うのが一般である。日本のサルは、本来、中国と違い、形態上さまざまな特徴を示して、単純であったため、サル一語に限られるようになった。サルの形態の違いを「手長ザル」「尾長ザル」「大ザル」と命名したのは、後世に、外国から移入されたサルの特徴を示すためである。

中国には、さまざまな種類のサルがいるため、サルに関する伝承・伝説が多く伝えられている。その中で、明代の白話小説『西遊記』の孫悟空は、あまりにも有名である。インドに経典を求めに行く三蔵法師に従っていく道中、魔王・妖怪を、神通力を発揮しながら退治し、無事目的を達成する。孫悟空の活躍は、三面六臂の大活躍である。翻って、日本の伝承や物語に登場するサルをみると、『猿蟹合戦』や『桃太郎』に登場するサルは、中国のものに比べ、スケールは、はなはだ小粒だ。『猿蟹合戦』のサルは、柿を独占したために、不格好にも手ひどい制裁を受けている。

しかし、正月にはんてんを着て登場する猿回しのサルは、新春を彩る立派な景物となっている。太鼓に合わせて芸をするサルは、皿回しやコマ回しをする芸人同様、芸達者である。新春こそがサルの晴れ舞台の時だと感じての大サーブスのように見受ける。だから、時には、「犬猿の仲」と言われながらも、

犬の背に乗ってサルが登場するのも、日ごろの仲を水に流して、新春を寿ぐ素振りと理解すれば、これも、新春に相応しい。その上、芸の中で「猿も木から落ちる」を演じてくれるから、なおさら楽しくなってくる。

一方、「猿は人間に毛が三本足りない」と言われ、人間に知恵が及ばないともされているが、「三猿」という言葉がある。三匹のサルが「見ざる」「聞かざる」「言わざる」の三態を示している。これは、かなり老獪なサルの一面を示しているよう。

さて、サル年である平成四年は、言葉通り小うるさく動く年になるのか、はたまた、老獪なやり方で国際情勢を乗り切る年になるのか、じっくり見ていきたいところである。

歌ことばの背景

『河北新報』平成八年三月三十一日

歌ことばを特に取りあげるとなると、一方に、小説のことば、新聞のことば、さらに広げると、話したことば、書きことばなどが挙げられよう。

「ことば」と言われる場合、これが他の「ことば」と違いが認められる場合に使うことになる。